第３部パネル　分科会 34　継続／大阪20、22、23／神奈川20

地域は、地域で孤立しがちな人とどうつながるか

提言

誰でも自分にできることから始めましょう。
重層的なつながりで、
一人ひとりを地域社会に包摂しましょう。

登壇者

【進行役】　古都　賢一氏　（社福）全国社会福祉協議会副会長
【アドバイザー】　奥田　知志氏　（認定特非）抱樸理事長
大空　幸星氏　（特非）あなたのいばしょ理事長
鈴木　訪子氏　（認定特非）おもちゃの図書館全国連絡会理事長、（一社）子ども村ホッとステーション理事
向谷地　生良氏　（社福）浦河べてるの家理事長

■ 寄せられた声から

- 視野の広い司会の古都さんの進行で、アドバイザー奥田さんの深い知性と幅広い実行力、目から鱗の大空さんのオンライン相談の話、鈴木さんの誰でもできそうだが実は誰にもできない実践力、精神を病んだり統合失調症の患者は実は普通の私たちの問題だと考える心温まる向谷地さんの話。大いに触発され考えさせられました。
- 自立＝依存先を増やすこと、という話がとても印象深かったです。講師の皆様のお話がとても分かりやすかったです。日々を笑顔で暮らせるよう自分でできる範囲で仕事も家庭も子育ても楽しんでいけたらいいな～、そして疲れた時には「助けてほしい」といえる世の中になるといいな～と心から思いました。
- めちゃくちゃよかったです！！大げさじゃなく未来への希望を感じました。世の中何でこんなことになってるのか…と思うことも多いですが、皆さんの顔を思い浮かべてこれからがんばろうと思わされました。

議事要旨　古都 賢一氏

進行役から、地域生活課題に対し多様な行動をされている４人の実践者の試みを伺い、「誰にでも手の届くつながりづくり、地域づくりの道程」を探りたいとしました。

向谷地氏から、メンタルヘルスの困難を抱えた人たちを単なる治療の対象者としてみるのではなく、誰にでも起きることとして彼らから学ぶとの考え方で地域の問題に取り組んだ実践の経緯、成果、現在地、今後を紹介いただきました。「幻聴は社会で作っている生理現象」というターニャ・ラーマン（スタンフォード大学の人類学者）の言葉を引用して、どういう地域社会をつくるのかは地域文化そのものの問題であるとし、常識への挑戦を掲げて地域に必要な事業を担うことで地域社会の有り様を変えるとしました。そして「当事者研究」を通じて明らかになる心の危機は地域社会の危機であり、誰もが氣付かぬニーズに対する「仲間からの大切なサイン」と表しました。

鈴木氏から、保育士として障害児を育てる親の声に耳を傾け、全員就学運動、学童クラブ運動などに関わったことを契機に、自閉症の子どもも心置きなく遊べる場としておもちゃ図書館の設置につなげ、ここを起点に多世代参加の実践活動に展開したことが紹介されました。おもちゃ図書館は、子どもが遊ぶ場であると同時に、「赤ちゃんもボランティア」というように、多世代が多様な役割を持って参加する場、親がほっとして話すことができ、知恵を出し合える場、誰もがともに育ち合える場と評し、一つ一つの行動が多機能であることに光を当てていました。そして、「お節介をしないと手が届かない」との姿勢で、自ら困りごとを言えない人々に対してその内面に氣付くことが大切であると話しました。

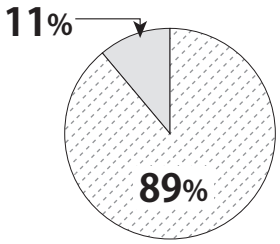
大空氏から、「２４時間３６５日誰でも利用可能」という「あなたのいばしょ」をチャット技術を活用して作り、相談そのものが誰にとっても当たり前にできるようにするという実践が、着想から運営方法に至るまで紹介されました。その上で、社会一般で「孤立」と「孤独」が混同されていると指摘し、「望まない孤独」は人間関係に起因し、頼りたいけれど話せないをなくしたい、としました。さらに、「孤独」は社会課題になったとしつつ、より良く対応していくためには、利用者の深刻な課題を見える化し、社会に一つは話を聞いてもらえる場があることの必要性を指摘しました。「駆け込み」に境界線は必要なく、「赤の他人が本気で話を」傾聴することがまず重要とし、そこで全てを解決するのではなく、地域につなげていくことが大切であると指摘しました。

アドバイザー役の奥田氏から、冒頭、救護施設の新設を核にして、北九州市を「こわい町」から「希望のまち」へ変えるための実践経過が紹介されました。次に、「助けて」は人類の健全な相互依存の表れで誰もが持っている性質であるとし、助けてと言えて、何か解決したいというまちを目指しているとしました。４０年前と社会の風景は様変わりしており、「家族機能の社会化」の取り組み例として、地域互助会を通じて行われる身寄りのない方同士での葬式が紹介されました。地域互助会という仕組みがあることによって一人暮らし高齢者などへのアパートの貸し渋りが減ったなどの効果があったということです。「相談の社会化」を通じて、子どもを「まち」で育てることの大切さを訴え、家族、地域、会社など多次元でつながることを提案し、モノやカネではなく、つながりそのものを誰もの「物語」に変えていくことが大切であると結びました。

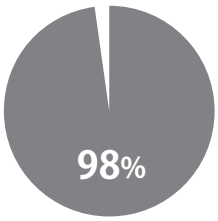
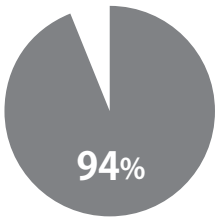
最後に、地域課題への多世代による多様な取り組み、誰でも自分にできることを活かすこと、誰もが声を上げられ相談できる社会を地域を超えてつくることなどを踏まえた提言をまとめ、パネラー、会場の参加者の賛同を得ました。

アンケートの結果　参加者概数：807名　回答者数：327名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方